優秀賞

「もの」としての絵本

工藤　裕子

柳田先生、こんにちは。先生にお手紙を書くのはこれで二度目です。一度目は、勤務校の生徒たちと、幼稚園に絵本読み聞かせボランティアに行ったことをお話ししました。あれから二年経ち、私も一児の母となりました。０歳の娘と絵本を読みながら、絵本についてあらためて気づいたことがあります。それは、絵本の「もの」としての価値です。「物質」「物体」としての価値といってもいいかもしれません。昔話を語り聞かせるのとも違う、タブレットで動画を見せるのとも違う独自の価値が、そこに「もの」として存在することで生まれていると思いました。

娘は、最初は何を読んであげても無反応でしたが、徐々に注視するようになり、絵本に手を伸ばすようになり、ページをめくるような仕草もするようになりました。最近のお気に入りは『くだもの』です。（実際気に入っているかはわかりませんが、親の目にはそのように見えます。）すいか、も、ぶどう、梨、りんご……次々出てくるみずみずしくて甘そうな果物に、手を伸ばしています。

そんな娘にいつか読んでもらいたい絵本があります。幼いころ心ひかれてどうしようもなかった本『まいごのペンギンだるま』です。南極のペンギンたちが作ったゆきだるま「ペンギンだるま」が迷子になってから、無事ペンギンたちのもとに帰るまでの話です。くまやきつねやねこに助けら

れ、冷蔵庫で眠らせてもらったりスケート場に連れて行ってもらったりします。冷蔵庫の中で眠るというのが実に魅力的でした。長らく実家に眠っていましたが、再び日の目を見ることとなりました。三十年経っても、絵本というのはあまり劣化しないのですね。子どもが何度もくり返し読んでも、多少雑に扱っても大丈夫なように、素材を吟味してあるのでしょうか。あるいは、こうして三十年後に紐解かれることを作り手が見越しているのでしょうか。私の落書きもあります。挿絵を模写しているようですが、何が何だかわかりません。この本、お母さんも読んでたんだよ、その落書きもお母さんが書いたんだよ……と言ったら、娘は何というでしょうか。楽しみです。ここに、絵本の「もの」としての価値があると思います。タブレット読書にはタブレットにしかない良さがありますが、データではなく紙だからできることもあります。今は大人になっている人にも子どもの頃があり、ここにある絵本に触れていた。絵本が「もの」として存在するから、そのことをありありと感じさせてくれます。

思い出してみれば、生徒たちが幼稚園で読み聞かせする絵本を決めるとき、「これうちにもある」というつぶやきを何度か聞きました。時には、自宅から絵本を持参する生徒もいました。読まない本は古本屋さんへ、あるいは廃品回収へ、というのが常識となっている中で、大切な本として残していたのだなあと今あらためて気づきました。データで持っているからいいとか、本屋でまた買えばいいということではなく、「私が幼いころに触れ、

大切に持っていたその本」であることが大事なのだと思います。彼らはこの後、どのような形で自分の読んでいた絵本と再会するでしょう。

大げさかもしれませんが、絵本を選ぶときは、「これがこの子にとって大切な一冊になるかもしれないな」と思わずにいられません。一冊一冊、心を込めて、絵本との出会いを作っていきたいと思います。